

論文の内容の要旨

パラグアイにおけるスペイン語のバリエーション—言語、社会、認知の相互作用—

青砥清一

本論は、南米パラグアイにおけるスペイン語の形態統語論的・語彙的バリエーションに関し、2004年に実施した現地調査の資料に基づき言語地図を作成し、その地理分布の記録から地域変種の発生・伝播・衰退の過程を推論すると共に、言語内外の諸要因（言語構造、人の認知機構、地域固有の文化・歴史・政治経済、先住民諸語との言語接触等）が相互に作用する言語変化の諸相について論じるものである。

序論では、方言学、言語地理学、構造主義言語学、社会言語学、言語類型論などの分野における言語変異の研究史を概観した。

第1章では、バイリンガリズム研究や言語地理学を中心としたパラグアイのスペイン語に関する先行研究を取り上げ批評した。

第2章は、パラグアイのスペイン語形態統語論的バリエーションについて、スペインから中南米までを含む広域言語地図を通じ、次に列挙する言語項目の変種の地理的属性を考察した：数と文法的性による語形変化、限定詞、レ代用法 (*leísmo*)、ボス法 (*voseo*)、直説法未来形、接続法過去形、グアラニー語後置詞の影響等。そして形態統語論的バリエーションの発生、伝播及び維持に関し、以下に述べる言語内外の要因を挙げた。言語内要因：類推、頻度、簡略化傾向、直示化傾向、体系的補完、潜在的祖語（ラテン語）特性。言語外要因：言語接触、言語中心地との地政学的関係、アイデンティティー、学校教育。

第3章は、移動動詞 **IR** 「行く」の構文《*ir a + inf.*》《*ir + ger.*》《*ir-y-verbo*》》に関して、スペイン語圏における機能変種の地域分布を考察した。〈驚嘆〉・〈皮肉〉・〈恐怖〉などの情意、並びに〈困難〉に向けて努力する意思等の周辺的なニュアンスに着目し、意味拡張の様相の分析に基づき、動詞 **IR** の概念構造を新たに提案した。移動行為に伴う認知活動として、動作主が目的地に向けて視界を「焦点化」する心的現象を仮定し、そのイメージが写像された **IR** 構文が主動詞の指示内容を焦点化することによって、その指示内容が心理的に際立つ事態であることを標示し、その心理的際立ちをもって、発話の脈絡に沿う話者の感情が伝達されると分析した。

第4章では、語彙バリエーションをテーマに取り上げた。語彙供給言語による分類、形態論的・意味論的分析、言語地図の作成、クラスター分析による地域区画を行った。文体的価値と地理分布に従い語彙変種を分類したところ、研究対象の語彙項目のうち8割程度において異形と標準形の双方が共存し、位相の高い異形と低い異形の割合はおおよそ半々であることが理解された。パラグアイでは地域変種が必ずしも口語や俗語に属するものではなく、教養層によって用いられるものも少なくない。標準変種と地域変種が共存する背景には、言語表現を豊かにしたいという人々の伝達欲求が根本にある。

終章の結論では言語変種研究の意義と重要性について述べた。中世のカスティーリャ語がアメリカ大陸に伝来してから 500 年以上が経過した現在、その広大な土地には多様な地域変種が分布している。変種の発生と伝播、定着と消失は、本論で述べたように、社会的・認知的諸要因が相互に作用して起こる。言語が常に変化し、流動的な記号体系であるのだから、それを静態的・自律的体系として仮定した上で共時的に記述することを目指すよりも、むしろその動態的性質をありのまま受容した上で変化のメカニズムを類型化し、人間の認知的・社会的活動の相互作用として、言語変化の普遍的な傾向を探求することが重要である。